

県内ワイド

情報のあて先は hensh

元気よ、届け

日赤県支部。被災地へ



日赤県支部長 山本裕行さん

被災地での救護活動 抑えることが、われわれに求められている。この時期、体の健康 管理とともに重要な要素となるのが、心のケアだ。被災直後には話せなかにちよっと傷跡があっただけで、とてもきれいな顔をしていた。娘が最後まで守ったので「十指の津波が襲ってきて、男の人がのま性。」

心のケア

次々と出てくる言葉を、ひたすら受け止める。これには、日ごろ

共感して一緒に泣こう

命を救うことが主眼となる。続く亜急性期は、避難所肺炎、衰弱、インフルエンザのまん延など、健康上の問題が数多く発生する。さらに慢性期になると、そこに高血圧、糖尿病などの慢性疾患の悪化、胃潰瘍、呼吸器感染症など、ストレスや生活環境の悪化による震災後関連疾患が起こってくる。

「施設に勤務している妹は入所者を最後まで誘導し続け、施設もたばに目が覚める」といって泣いていった。その夢を看る看護師も、さすがに「自分の力が吸い取られるよっだ」と話していた。

「心身のケア」は、被災者にはもちろん、われわれ救護班にも必要。そのためには、話を聞いただけでなく、対話し共感し合うことが、被災者と支援者の心を通い合えば、それが互いの心のケアになる。そう実感している。

特に高齢者は、慢性疾患にかかっている人が多い。ストレスや劣悪な生活環境による健康状態の悪化を早期発見し、早期治療できる医療体制を構築する。震災関連死を最小限に

「二カ月後の出産を私たちが救護班には、福井赤十字病院の勝木美奈子看護係長が、巡回先で「いつでも救

た。もう死にたい」と話す三十代男性。「娘は生後十カ月の子連れ、子ども(孫)を保育所に迎える行く途中、津波にのみ込まれた。赤ん坊の遺体を見たら、おでこにちよっと傷跡があっただけで、とてもきれいな顔をしていた。娘が最後まで守ったので「十指の津波が襲ってきて、男の人がのま性。」



避難住民と話す勝木美奈子看護係長(右)＝1日、宮城県石巻市雄勝地区で(日赤県支部提供)

震災2ヵ月 あらためて思う 支えられてこそその活動

「日赤は、うらやましー」われわれ日赤救護班と一緒に、被災地に入ったボランティアの皆さんからかけられた言葉だ。理由は「救護活動を仕事として行うことができるから」。

友人たちは皆、被災地で活動する私に「ありがとう。頼むな」「友人として誇りに思うよ」と言葉をかけてくれる。近所のおばちゃんたちも「ヒロちゃん、がんばってや」。

被災直後の一カ月間、ほとんど家に帰られなかった私に、母親は「毎日お疲れやのー。大丈夫か」と涙声。「母ちゃんが、元気な体で産んでくれたから大丈夫や」と笑って、また涙した。

被災地で余震を感じた真夜中、すぐに県危機対策・防災課の職員から「大丈夫ですか」と電話が入る。被災地に向かうときも戻ったときも、野口正人院長以下、福井赤十字病院の仲間たちの拍手に包まれた。

義援金をはじめ、さまざまな善意を寄せいただいた皆さん。かけてもらった温かな言葉。すべての県民からの思いを託されて、私たちは救護に向かっている。私たちが動くのではない。動かしてもらっている。

赤十字の仕事に誇りを持ち、常に被災者のために、一人でも多くの被災者救護のために現場で活動できるのは、数多くの、本当にたくさんの皆さんの思いに支えられてこそ。東日本大震災の発生から二ヵ月。あらためて、そのことを思っている。

(山本裕行)